

近現代の家族と神社

森岡清美

一、問題

編集者から示唆されたテーマは「近現代の家族」であったが、神社との関連を考慮することなしに近現代の家族を論じたのでは、今回の特集の趣旨に合わないと考えて、掲出の標題を設定した。しかし、家族を神社に結びつけるには、新生児の宮参り、神前結婚式、神葬祭といったライフサイクル上の出来事に注目するか、神棚、神宮大麻といった家庭内の礼拝設備や礼拝対象に焦点を置くなど、工夫が必要である。

これに対して、家族と寺院は直接に結びついている。なぜなら、日本の寺院は家の先祖供養を担ってきたからである。檀家の先祖供養を担うことによって、子々孫々にわたる檀家の直系的な存続が寺院の師資相承を支え、寺院の世代的継承を担保してきた。したがって、家と寺院との結合

はほとんど自明の理であった。家と寺院との関連を問うとき、現代における家の変化が寺院にどのような影響を及ぼしているかという、基本的な問題がただちに提起される。家族と寺院の関係を問うために特別の工夫が要らないのである。

寺院は家族に結びつくのに対し、神社は地域に結びついている。これは地域に居住するかぎり日常的に経験する事実であって、挙証の必要がないが、あえて一つの資料を取上げてみよう。近代神社制度の基礎となった明治四年五月一四日付太政官布告第二三五「官社以下定額、神官職制等に関する件」の別紙を点検すると、神社はまず官社と諸社に大別され、諸社に府社藩社県社と郷社の二等が示されている。府藩県社は府藩県崇敬の社、郷社は郷邑産土神と注記されているから、諸社の地域対応性は明瞭である。官社のうち国幣社は、官幣社のない旧国について一社づつ指定

されるのが原則であったようで、大体旧国の一の宮が指定されているところをみれば、ここにも地域性は濃厚である。官幣社、とくに新設の官幣社は地域性が乏しかったが、例えば明治神宮はその維持運営団体に東京府・東京市・東京商工会議所を加えることによって、帝都の巨大な鎮守の性格が与えられた。このように、神社は地域と結びつき、住民が氏子である一定の地域、あるいは崇敬者が集住する一定の地域をそれぞれの神社について措定することができる。神社が地域と密着あるいは相即する事実を鑑み、家族の地域移動が神社に及ぼす影響を考察することによって、標記のテーマに接近することを試みたい。家族の地域移動をより一般的な用語で捉えるなら、人口の地域移動である。人口の地域移動と家族の地域移動は等価ではなく、人口の地域移動のほうが広い概念であるが、より広い部分、つまり人口の個人移動も、移動した個人の移動地における家族形成により、あるいは前住地に残した家族の合流によって、家族移動につながる。しかも調査対象に個人でなく世帯をとるなら、人口の地域移動で近似的に家族の地域移動が神社に及ぼす影響を論じることができるといえよう。

二、事例

人口移動が自然増人口の流出でいどであるときは、他に

大きな変動要因がないかぎり、地域の社会構造と社会生活は維持され、その一環である神社祭祀組織も神社を巡る地域生活にも大きい変化は生じないであろう。ところが、顕著な人口流出がつづく、祭祀組織は維持されえず、また必ず若年人口が減少する結果、例えば祭礼に繰り出す神輿の担ぎ手が揃わないため、祭礼のもっとも活気ある部分が萎縮して、地域住民が愉しみにした祭礼も魅力の乏しいものとなる。こういう事態は過疎地なら至るところで経験されたにちがいない。では、逆に来住者の流入によって地域人口が激増した場合、どうしたことが神社を巡る生活に起きるのだろうか。人口が増えただけ氏子が増えるといった単純なことでは決まらずである。常識的にみて、氏子も少しは増えるだろうが、氏子ではない住民の増加が圧倒的であろう。その結果どういふことが起るのか。人口激増地域の神職が座談会を開いてそれぞれの経験と観察を語りあえば、だいたいのところは把握できるにちがいない。

わたしは四〇年も前にこの問題に関心をもち、実態調査によって解明を試みたことがある。昭和四〇年代初頭、東京の人口増加は近郊に集中していたので、東京西郊と南郊でそれぞれ一地点を選び、世帯を抽出して面接調査をしたのである。東京近郊のわずかに二地点の調査であるから、これで当時の日本に起きていた動向を的確に把握できた保証

はない。また、反覆調査を行って動向の把握を確認も補正もしていないので、ほぼ半世紀にわたる変化に測鉛を下ろすことができない。しかし、この種の調査が乏しいことを思えば、四〇年前の調査に基づく立論にも、いくらかの価値があるかもしれない。そう考えて國學院大學『日本文化研究所紀要』第二二輯に掲載されたわたしの調査報告⁽¹⁾に拠って、標題のテーマを論じることにする。なお、昭和四〇年初頭という戦後二〇年をへた時点の家族を対象にして、「近現代」の家族を論じるというのには無理があるが、後に述べるように調査対象に日本近代の家族的な直系家族世帯と現代の核家族世帯の両者が混在していることと、標題を「現代」の家族と改めるには資料がやや古いことから、どちらかといえば「近現代」が妥当と考え、あえて修正しなかつたことを念のためお断りしておきたい。

選んだのは、調査の便宜があつた東京西郊三鷹市野崎と南郊狛江市駒井の二地点である。両地点とも昭和三〇年代から四〇年代初頭にかけて顕著な人口増を示していた。昭和三〇年の人口を一〇〇とすれば、三鷹市の昭和四三年人口は二一一、やや遅れて人口増が始まつた狛江市では三五二という瞠目的な伸びを示し、増のほとんどが人口の流入による社会増であつた。したがって、顕著な人口流入による地域人口の激増が神社にどのような影響を与えたかを研

究する条件を満たす地点であるといえよう。

野崎については、昭和四二年七月現在の住民登録世帯一、三三九のうち、单身世帯と欠損世帯（一夫婦も含まない世帯）を除く六三三世帯を母集団として、一三一世帯のサンプルを得、同年一一月の実査で調査が完了した一一九世帯を解析の対象とする。他方駒井については、同じく昭和四二年七月現在の住民登録世帯七二六のうち、单身世帯と欠損世帯を除く五二三世帯を母集団として、一二五世帯のサンプルを得、同年八―九月の実査により調査が完了した一一四世帯を解析の対象とする。昼間に訪問する調査の便宜を考慮して、妻を面接対象とし、老若二世代の妻がいる直系家族世帯では若い世代の妻に面接したのは、なるべく新しい動向を捉えたいと考えたからである。

人口流入による人口増加の地元神社に対する影響を解明するには、神職、氏子総代などキーパーソン個人に対する聴取調査も考えられるが、すでに述べたように、わたしは世帯（家族）に対する面接調査という方法を採用した。キーパーソンの情報では曖昧にしか語られない末端の動き、まさに新来住者たちの動向をこそ把握したいと考えたからである。容易ならぬのは、調査資料をどのように解析すれば調査目的を達成できるかの問題である。わたしは、調査対象を地元世帯と来住世帯、来住世帯を来住の新旧によつて

分け、来住が古い世帯群と新しい世帯群を神社関連事項について比較することにより、課題に接近することを試みた。

わたしが採用した来住時期別区分はつぎのとおり。I 地元世帯・壬申戸籍登載の在来世帯およびその分家で初代が死亡している世帯、II 準地元世帯・地元世帯の分家で初代が生存している世帯および昭和二〇年までに来住した世帯、III 昭和二一―三〇年来住世帯、IV 昭和三一―三五年来住世帯、V 昭和三六―四〇年来住世帯、VI 昭和四一年以降来住世帯、の六群である。調査完了世帯数を来住時期別にみると、野崎では I 二三%、II 二三%、III・IV 一四%、V 一九%、VI 二二%、駒井では I 二四%、II 一〇%、III・IV 一三%、V 三五%、VI 一八%となる。地元・準地元が野崎では半数近く、駒井では三分の一で、駒井のほうが来住世帯の比率が高いことと、近郊化は三六年以降本格化したことが窺われる。東京都の人口増加率は昭和四〇年代初頭でピークを越えたようであるから、近郊化が峠に達したあたりで二地点の調査をしたことになり、来住人口の急増が神社に及ぼす影響を調査するには格好のタイミングであったといえよう。

二地点調査を実施した昭和四二年は、まだ右肩上がりの経済成長の唯中にあつた。三年まえの三九年には東海道新幹線が開業し、東京オリムピックが華々しく開催され、四

一年には新東京国際空港の建設が決定され、完成乗用車の輸入が自由化されるなど、経済成長を背景として人口移動が国内的国際的に拡大する一方、大学紛争の火種があちこちで燻り始めて、安定した保守体制を破るような社会変動への漠然たる憧憬が漂う時代であつた。

本論に入る前に言及しておきたいことが二つある。一つは観察対象の世帯形態である。野崎でもまた駒井でも、I 群地元世帯の過半数は直系家族世帯で家の形態をとり、他方 III・IV・V・VI 群、つまり来住世帯の約九割が野崎でもまた駒井でも核家族世帯であつた。家的な地元世帯と核家族的な来住世帯をともに対象にしていることは、本稿の趣旨に合った対象をえたものといえよう。

つぎは両地点所在の神社に関する情報である。利用しえた資料は昭和二七・八年頃調整された現行神社明細帳であるから、地域の近郊化が始まるか始まらないかの、調査世帯で言えば I、II、III 群だけの時代の情報である。

まず野崎の八幡社は享保年間の創祀と伝えられる。おそらく武蔵野の開墾、村落の創始と関係があるのだろう。野崎村の産土神として住民の崇敬厚く、明治四年一〇月村社に列せられた。関東大震災のため社殿が倒壊し、大正一五年一二月再建して今日に至るといふ。五〇五坪の境内に、間口一間半奥行一間半の木造トタン板葺の本殿、間口三間

奥行二間の入母屋造りトタン板葺の拝殿、間口七間奥行二間半の木造垂鉛板葺平屋の社務所がある。九月一五日の例祭、二月の祈年祭、一一月の新嘗祭の他に、一〇月八日の薬師縁日を祀る。氏子一五五世帯というのは神札を受ける世帯の数であつて、昭和二七・八年頃神札を受けない世帯がすでに七〇ほどあつたという。神職は世田谷区給田の六所神社宮司の兼務。

駒井の日枝神社は創立年代不詳であるが、野崎八幡社と同じく明治四年一〇月村社に列せられている。二〇六坪の境内に、間口一間奥行一間の本殿、間口二間奥行二間半の覆殿、間口二間半奥行二間の拝殿、間口一間奥行一間半の太鼓倉庫がある。一〇月七日の例祭の他に祭が年三回執行される。氏子は四六世帯で、神社と無関係な住民はまだあまりいなかった。神職は狛江町和泉の伊豆美神社宮司の兼務。野崎八幡社に比べて、境内が狭く、社務所がなく、氏子世帯数も少なく、ムラの近郊化の開始が遅れていた。しかし、武蔵野の農家集落の鎮守として齋祀られていることには差異がない。

神社をめぐる住民生活に対する家族の地域移動の影響を点検するために、来住時期別比較をするのであるが、神社をめぐる住民生活の何に着眼するのが有効であるか。わたしはまず鎮守に対する氏子意識と氏子行動を取上げ、つき

に神社神道に関する行動と意識を問題としたい。後者は氏子としての意識および行動と相互規定の関係にあるので、前者だけ切り離して論ずるのでは不十分と考えたのである。

三、氏子意識と氏子行動

氏子意識とは地区に鎮座する神社を氏神とみ、自らをその氏子とみなす意識である。地元神社への帰属意識といつてもよい。このような氏子意識を捉えるために、次の三つの質問を準備した(番号は調査票のなかの質問番号)。

問53 おたくの氏神(産土神)はどこですか。―野崎八幡社(駒井日枝神社)を挙げたものは+、それ以外は一。

問55 ご主人(姓が妻方の場合はおくさん)の郷里(出身地)の神社と野崎(駒井)の神社と、どちらがおたくにとつて氏神という感じがしますか。―野崎(駒井)の神社が郷里の神社、野崎(駒井)の神社のほうが氏神、どちらも氏神、以上三種の答えは+、郷里の神社のほうが氏神、どちらも氏神とはいえない、以上二種の答えは一。

問56 おたくは野崎(駒井)の神社の氏子ですか。―氏子である+、氏子ではない、わからない、以上二種の答えは一。

世帯の氏子帰属についての妻の意識を問うたものである。各問に対する回答を+-に振り分けたうえで、三問ともに

+であったのをA氏子意識明瞭、三問とも-であったのをC氏子意識なし、+-混合するものをB氏子意識曖昧と規定し、ABCの分布を来住時期別に観察した。

その結果、来住時期の早い世帯ほど氏子意識の明瞭な者が多く、来住時期の遅れた世帯ほど氏子意識のない者が多い。野崎の例で言えば、A氏子意識の明瞭な世帯が、I群では一〇〇%、II群では八九%、III・IV群では急落して二九%、V群で一七%、VI群で四%と段階的に減少していく。他方、C氏子意識のないのは、さすがにI群・II群では皆無であるが、III・IV群以下では急増してVI群では七二%に達する。駒井でも、来住時期の新旧と氏子意識の有無とは見事に対応しており、まさに氏子意識は来住時期の新旧によって組織的な動きを示している。

このように両地区に共通の傾向が現われている一方、全体としてのACBの分布にはかなりの差異があることも無視できない。野崎ではA（明瞭）がもつとも多く二分の一を超え、B（曖昧）がもつともすくなく六分の一強にすぎない。他方駒井では、Bがもつとも多く二分の一弱、Aがもつとも少く四分の一弱にすぎない。同じ東京近郊でも氏子意識を大づかみに捉えた場合、その強弱濃淡には地区差があるようである。

この調査を実施した頃、氏子地域への来住人口激増の結

果、氏子の実質のない住民が増えた事態を把握するため、岡田米夫氏が氏子を実質氏子、祭祀氏子、傍観氏子の三つに分け、つぎのように性格づけた。

実質氏子―従来の慣行による氏子費を完全に納める人々。

大体終戦前から在住する。

祭祀氏子―祭祀の時つきあい祭礼費だけを納める人々。

終戦後その土地に住んで一〇年位になる。

傍観氏子―近年の来住者で土地になじみが薄い者。

この性格づけは、神社費負担の程度と来住時期の新旧とが相即するとの前提に立って、この二つを組み合わせたものである。わたしの調査でも祭祀のさい寄付するかどうかについて質問したが、祭祀のさいの寄付だけで神社費負担を捉えることに無理があった。そこで、神社費負担とは直接には関係なく規定された氏子意識をもって、氏子をA、B、Cに分類したのである。これを前掲三分類に対応させれば、Aは実質氏子に、Bは祭祀氏子に、そしてCは傍観氏子に引きあてることができよう。終戦前から在住するI・II群はほとんどしくは大部分Aであって実質氏子といえ、戦後来住のIII・IV群にはA・B・C混淆するが、全体としてBによって代表されるとみるなら、祭祀氏子というものが当たっており、昭和三六年以降来住のV・VI群では圧倒的にCが多く、傍観氏子といえよう。

つぎに氏子行動を取上げる。ここで氏子行動というのは、氏子総代など神社の運営にとくに熱意をもつ人々に限らず、ふつう氏子なら一般に行う神社と結びついた行動をさす。わたしの調査票が含む氏子行動の項目は左の四つであった。

問58 野崎（駒井）の神社の祭りの日に、おたくではふだんとちがったごちそうをつくりですか。―①つくる、②つくらない。

問59 おたくでは野崎（駒井）の神社のお札をまつつていますか。―①いる、②いない。

問63 野崎（駒井）の神社の祭りのさい、おたくでは参拝なさいですか。―①参拝する、②参拝でなく余興をみにゆく、③参拝せず、余興もみにもゆかない。

問64 おたくでは年頭に野崎（駒井）の神社に参拝なさいますか。―①する、②しない。

先に考察した氏子意識は回答者である妻個人の意識に傾きがちなものに対して、氏子行動は回答者個人というよりも世帯全体の行動を示しやすい。さて、以上四項目のそれぞれについて、①（問63だけ②を含める）を選んだ、つまり問われた行動をすると答えた世帯の比率を来住時期別に観察すると、来住時期の新しい群ほどその比率が遞減しており、群間の落差はⅡ群とⅢ群の間でもっとも著しい。予想どおりの結果である。

つぎに四項目を組合わせて、四つとも①であるのを α 十分な氏子行動、四つとも②（問63だけ③）であるのを γ 氏子行動なし、①②あい混ざるのを β 不十分な氏子行動と名づけ、その比率に注目しよう。まず全体として β がもっとも多く、野崎でも駒井でも半ばを占めているが、 α は野崎のほうに多く、 γ は駒井のほうが多いという差が認められる。これは、先にみた氏子意識で、野崎に α がもっとも多いのに対して駒井には β がもっとも多かったことに対応するのであろう。

α β γ の分布を来住時期別に観察すると、野崎では α はⅠ群とⅡ群に集中する。 β はどの群にもみられるが、とくにⅢ・Ⅳ群とⅤ群において高率である。 γ はⅠ群にはなくⅡ群から出現してⅥ群では八割に達している。かくて、 α はⅠ群とⅡ群を、 β はⅢ・Ⅳ群とⅤ群を、 γ はⅥ群を特徴づけていることが判明する。駒井ではやや異なつて α がⅠ群だけを、 β がⅡ群、Ⅲ・Ⅳ群、Ⅴ群を、 γ がⅥ群を特徴づけているが、大勢には何らの変わりがない。

以上、氏子意識と氏子行動を観察した結果、来住時期によつて氏子意識の明瞭度に一定の傾向があり、また氏子行動の十全度にも同様の傾向が明らかにみられる。そこで、氏子意識の明瞭度と氏子行動の十全度との関連をみると、予想どおり、氏子意識が明瞭な群ほど氏子行動は十全

であり、また逆に氏子行動が十全な群ほど氏子意識が明瞭であるといえる。しかし、氏子意識明瞭（野崎）あるいはあいまい（駒井）と判定された者、氏子行動不十分と判定された世帯がそれぞれほぼ半数に達するので、意識明瞭だからといって必ずしも行動十分であるわけではなく、また行動不十分だからといって必ずしも氏子意識がないわけではない。この点に鑑みて氏子意識と氏子行動それぞれの程度を組合わせ、該当する事例数を地域ごと比率で示して、氏子を分類してみた。

氏子意識	氏子行動	事例数(%)	氏子分類
A	a	野崎二五 駒井一三	中核氏子（Aとaの組合わせ）
A	β	三七	一般氏子（Aとaの組合わせでなく他方Cも γ も含みず）
B	$a \cdot \beta$	四六	
A・B	γ	一九	周辺氏子（Cあるいは γ を含む）
C	$a \cdot \beta$	一九	
C	γ	一九	休眠氏子（Cと γ の組合わせ）

氏子の四類別に与えた名称は、J. H. ファイヒターの nuclear, modal, marginal, dominant⁽⁵⁾ というカトリック教会の教区民分類にならったものである。これを岡田氏の分類名称と対応させるなら、中核氏子と一般氏子は実質氏子に、周辺氏子は祭礼氏子に、休眠氏子は傍観氏子に相当するといえよう。岡田説のほうが氏子の実態を具体的に捉えている強みがあるが、ファイヒター説が実質氏子のうち行動的な分子を中核氏子として分別した点、休眠氏子を傍観者として突き放さず、目覚めを待つ姿勢を示している点は留意してよいだろう。

一般氏子はやはりもつとも多い。これをモードとする分布は野崎と駒井でよく似ているが、ただ駒井では一般氏子がとくに多く、その分中核氏子が少ない点に唯一の相違がみられよう。これは駒井におけるAおよびa、とくにAの少なさに由る。それは、駒井のII群に新しい分家が多く、また被面接者となった妻に三五歳未満の若い女性が多かったため、II群で明瞭な氏子意識を示す者が比較的少なかったことに起因している。

来住時期別に氏子の類別分布をみると、I群とII群は中核氏子か一般氏子であるが、I群はより多く中核氏子に傾く。III・IV群からVI群までは一般氏子・周辺氏子・休眠氏子にまたがるものの、重点はIII・IV群一般氏子、V群周辺

氏子、Ⅵ群休眠氏子ということになる。かくて、意識と行動の両面から捉えた神社に対する住民の関係は、来住時期によって著しい差のあることが明らかになった。来住人口の急増は、周辺（祭礼）氏子、さては休眠（傍観）氏子の急増をもたらすという、予想された傾向があらわにされたが、従来からの地元住民はこの傾向によって影響を受けることが少なく、中核氏子でなくとも一般の実質氏子として神社を支えつづけていることも、あわせて実証されたといえよう。

以上のように、氏子の類別は来住時期によって規定されるところが大きいが、世帯に老人を含むか否かによっても左右されるのではないだろうか。この点を吟味するために、六〇歳以上の老人を含む世帯（野崎三八、駒井二七）と、これを含まずかつ夫（世帯主）が四〇歳代である世帯（野崎二七、駒井一九）とを比較したところ、Ⅰ―Ⅱ群では老人を含む世帯は中核氏子に集中し、夫四〇歳代の世帯は一般氏子に集中するという明らかな差異がみられた。しかし、Ⅲ―Ⅵ群では老人を含む世帯も含まない世帯もともに一般氏子か周辺氏子であって、前者のほうが地元神社に近いという明証はまったくない。したがって、老人を含むか否かが意味をもつのは、Ⅰ―Ⅱ群においてだけであることが判明した。そして、老人を含むグループでも含まないグループ

でも、ともにⅠ―Ⅱ群のほうがⅢ―Ⅵ群よりも地元の神社に近い氏子分類に傾くことは、来住時期別分析がより適切な分析軸であることを示唆するものである。なお、Ⅰ―Ⅱ群の老人を含む世帯は直系家族世帯であり、Ⅲ―Ⅵ群のそれはおそらく老人の核家族世帯だろう。来住時期が新しい世帯よりも古い世帯ほど、そして核家族世帯よりも直系家族世帯のほうが、神社に近い意識と行動をとっているであろう。Ⅰ―Ⅱ群で老人の存在が意味をもつのは、直系家族世帯では老人が神社とかかわる役割を担当していることを推測させるものである。

四、神社神道に関する行動と意識

つぎに、対象地区の地元神社をめぐる意識と行動とは一回り広い、いわば神社神道的行動と意識に注目する。行動としては、神棚・屋敷神祠の保持、神宮大麻とその他の神札の奉安、年頭・祭礼・新生児のための神社参拝、意識としては、神社および祭礼の必要性に関する意識を調査し、来住時期別に解析した。

神棚・屋敷神祠の保持率、神宮大麻・その他の神札奉安率は、来住時期の新しい群ほど低率となっている。Ⅰ―Ⅱ群で神棚のない世帯は少数に止まり、保持しない世帯はかつて保持していたが家屋新築のさい設けなかった、家を

新築して分家したとき設置しなかつた、⁽⁷⁾創価学会に入会したとき取り払った、など保持から非保持への明らかな推移を示す。屋敷神祠の保持はⅠ群にかぎられ、かつ低率である。Ⅱ群で例外的に保持するものは酒屋と自転車店であつて、彼らが祀るイナリサンと呼ばれる屋敷神は農耕神であつたが、今日では商売祈願と結びつきやすいのであろう。

つぎに、地元神社以外への年頭・祭礼のさいの社参については、Ⅰ群以外ではこれまでみたような来住時期別の明瞭な傾斜型は見出されず、やや低まつたまま推移する一種の拡散状態を示している。どの群もそこその高さの拡散状態は、初詣でに地元の日枝神社よりは他社へ参拝する駒井でより顕著である。初詣での社参対象は、野崎でも駒井でも明治神宮が圧倒的に多く、参宮橋駅で下車すれば明治神宮に参拝できる小田急沿線の駒井でこの傾向がより著しい。他方、祭礼のさいの社参対象は地元に近い範域に限られており、初詣でのような遠方の名社への集中はみられない。

新生児の宮参り（地元神社を含む）についてはⅠ・Ⅱ群の実行率は著しく高いが、Ⅲ・Ⅳ群で急落した後、反転してⅤ群Ⅵ群とやや高まつて一種の拡散状況を示す。反転するのは、来住時期の新しい群ほど二〇歳代の妻（被面接者）の比率が高く、したがつて地元の神社へ新生児の宮参りを

した経験率が高いからである。

神社神道の行動として取上げた、神棚・屋敷神祠の保持率、神宮大麻・その他の神札の奉安率は、来住時期が新しい群ほど低率の、傾斜型を示すのに対して、地元神社以外への年頭・祭礼のさいの社参はⅠ群以下で、新生児の宮参りはⅠ群・Ⅱ群以下で、低まつたままそこその高さの拡散状態を示している。地元神社をめぐる氏子行動が明瞭な来住時期別傾斜型をあらわにしたが、それより広い神社神道の行動のなかに、来住時期にかかわらない拡散状態が出現しているのである。

神社神道の意識として、神社の祭礼が必要かどうかの意見と、そもそも神社が必要かどうかの意見を問うている。

祭礼が必要という意見よりも神社が必要という意見が高率であることと、祭礼と神社ともに必要という意見が駒井よりも野崎のほうが高率である外は、二問に対する回答は同じ傾向を示す。そこで一括して調査結果を要約すると、「絶対必要」というのは一割に満たず、「あつたほうがよい」というのがもつとも多く五割から六割を占め、それにつぐのは「あつてもなくてもよく」で二割弱から三割弱、「ないほうがよい」一割前後以下である。したがつて、「あつたほうがよい」というかなり積極的な意見が代表的といえよう。「絶対必要」と「あつたほうがよい」という肯定的

な意見を合算すると、祭礼については六割前後、神社に就いては七割弱に達する。神社も祭礼もまずは支持されているのである。

この支持率を来住時期別に観察すると、来住時期の古い群ほど比率が高いが、きびしい傾斜型でなくあるていど拡散している。なぜ拡散状態を示すのか。その理由を理解するためには神社を必要と認める理由を探ってみなければならぬ。神社を必要とする理由としては、儀式と宮参りのため、町内のまとまりのため、しきたりとして、心のよりどころとして、の四項が挙げられた。まず「儀式と宮参りのため」は新しい来住者群ほど減少しており、「町内のまとまりのため」は新来住者の間ではみられなくなっている。他方、「しきたりとして」の比率は維持されており、「心のよりどころとして」も同様である。後二者によって、来住時期別に支持率を解析した場合あるていどの拡散状態が検出されるのであろう。「町内のまとまりのため」もしくは「儀式と宮参りのため」神社が必要であるという意見の減少は、神社の地元性の稀薄化、いいかえれば神社の地元社会統合機能の退化を物語っている。神社は特定の地元社会との結びつきを弱める一方、生活慣習として、あるいは宗教文化として、来住の新旧にかかわらずに拡散した形で、必要性が認められているのである。

以上の点検によって、氏子行動と氏子意識にみた鋭い傾斜型に対して、神社神道の行動と意識の特色は傾斜型と拡散状態の併存にあることが判明した。もし傾斜型を示すだけなら、新しい来住者の地元神社への無関心状態は説明できても、明治神宮など名社への初詣の大群は理解不可能となる。しかし、われわれは拡散というもう一つの傾向を見出した。神道的生活慣習の拡散のゆえに、地元性が希薄化しても一むしろすればこそ、名社への殺到が生起するのである。

五、考察

野崎と駒井という東京近郊の二地点について神社信仰の実態を調査し、住民の来住時期別に調査結果を解析することによって、急激な人口流入の影響を明らかにすることを試みた。その結果、両地点の相違点と共通性がともに把握されたが、全体として相違点より共通性のほうが強烈であって、そこに神社信仰に対する近郊化の影響を看取することができた。

共通性の一面は、地元神社にかかわる行動と意識において来住時期別にみられる傾斜型である。しかし、その傾向の谷間に、年頭および祭礼のさいの社参、新生児の宮参りなど、地元の神社と結びつかなくとも成立しうる行動や、

神社をしきたりとしてまたは心の拠りどころどころとして必要とする意識の、拡散状態も観察された。これまた共通性の盾の一面をなすものである。人口流入の激しい近郊では、神社信仰は傾斜型と拡散状態という異なった二つの共通の様相をあらわにしている。傾斜型とは来住時期別遅減の傾向であり、拡散状態とはこの傾向を示さないことである。二つは一見矛盾しているかにみえるが、実はある一つの動向の異なる側面と考えられる。

ある一つの動向とは神社信仰の脱地域化とも呼ぶべき動向である。新しい来住世帯ほど氏子意識が稀薄で氏子行動も乏しい。これが傾斜型である。そこで、人口流入が激しく新しい来住世帯の多い地区では、地元神社は近隣生活から浮き上がった存在となる（脱地域化）。ところが、ある種の神道的慣行と意識とは、地元性を喪失したまま、近隣の共同生活から切り離されたままで、いな地域性を喪失し、近隣の共同生活から切り離されたればこそ、文化的慣習として拡散的に保持される。つまり、神社信仰の脱地域化から、拡散状態が生み出されるのである。

傾斜型は、敗戦後の政治的社会的思想的状況のもとで、観光資源になるような特殊神事も、広い氏子区域もない近郊神社の衰退をもたらした。野崎八幡社や駒井日枝神社の現状維持的衰退は、このような背景をもっている。他方、

拡散状態は広く崇敬者を動員しうる名社大社の繁栄を促した。年頭における明治神宮への殺到はこの例である。こうして、脱地域化という傾向が、一方では傾斜型において多数の集落神社の衰退をもたらし、他方では拡散状態において一部神社の繁栄につながっている。しかし、一部の大社の賑わいは必ずしも神社信仰の復興を予見させるものではないのではないだろうか。

近郊の二社からえた知見は、おそらく近郊の集落神社一般の動向を映し出しており、さらに都市的社會における神社の動向を予見させるものでさえあるだろう。そのようにわれわれの知見の妥当性を広めに設定するとき、つぎのような仮説を設定することができる。

神社はまず一門の氏神（祖神・守護神）として成立し、ついで一門の衰亡や一門以外の住民の参加によって地域の鎮守として再生した。もちろん最初から地域の鎮守として存立し来たった神社もあるし、また一門の氏神でありつづけた神社もあろうが、大局的にとらえるなら、一門の氏神から地域の鎮守へという進化があったといえよう。これは、祀る側からいえば氏人から（村人^{キョト}をへて）氏子へという推移であった。ところが今や社會の都市化により、地域の神社も脱地域化して広域の崇敬社になりつつある。かつて一門の氏神が脱族縁化するさい、その波に乗った神社は存続

し、乗りえなかつた神社は没落したように、地域の鎮守の脱地域化にさいして、広域の崇敬社へと脱皮する条件を備えた神社は成長し、脱皮できなかつた神社は衰運を辿ることになるだろう。

広域の崇敬社とは、一門の氏神が主に族縁（地縁・心縁もあるが）に依存し、地域の鎮守が主に地縁（心縁もあるが）に依存したのに対し、主に心縁に依存するものである。したがって、崇敬者を遠近から吸引しうる魅力をもたなければならぬ。魅力とはあらたかな靈験であったり、莊重醇美な祭儀であったり、さらには「忝さに涙こぼるる」神域社殿のたたずまいであったりしようが、また人の心をうつ教えもこれに加わりうる。地域の鎮守から広域の崇敬社への進化の唯中にあるとの仮定から、この進化を乗り切るためには何をなすべきかの方策も、演繹的に導出されることだろう。

脱地域化の動向のなかで、無名で魅力のない集落神社は衰運を辿らざるをえない。しかし、在来の祭礼にのみ依存せず、また形式だけの儀式に終始することなく、さまざまに年中行事、七五三や結婚式などの通過儀礼をくり込み、地域の職別組合との結びつきをもち、また教説面の工夫を加えることによって、遠方の大社のような整備は覚束ないにせよ、近隣の個人商店のような、より日常的で親しみ

やすい、心のかような神道的施設として、生き残りうる近郊の集落神社もあることだろう。⁽⁹⁾このようなモデルを示して、若い神職に元気を与える協同の努力が求められるのである。

注

- (1) 森岡清美・花鳥政三郎「近郊化による神社信仰の変貌」國學院大學『日本文化研究所紀要』一二二輯、昭43、七一―一三六頁。
- (2) 神社本庁調査部『神社運営法』（二二輯、近代社会を生き抜くための―）、昭39、一〇―二〇頁。
- (3) 祭礼の日の特別の食物として必ず挙げられるのは赤飯であり、その他には煮メが頻出する。それ以外は、うどん、そば、すし、団子、五目飯、おはぎ、などが僅かづつ。
- (4) 神札は野崎では秋の例祭のさい神職が町会員の数だけ準備してくる（一体一〇円）。昭和四二年九月には神職が四二〇体もってきたが、町会員は四四六世帯に達していた。不足分は氏子総代が神饌物を届けに神職宅を訪問した時、受けとった。駒井では祭礼の前に年番が各家を巡回して寄付を募る。神札はこの寄付をした世帯に対して、祭礼の後、神饌物といっしょに配付される。
- (5) Fichter, Joseph H., *Social Relations in the Urban Parish*, University of Chicago Press, 1954, Chap.2.
- (6) 野崎では、その他の神札は所属の講を介して講員に配付されるが、神宮大麻のほうは町会で氏子総代が年末に希望者の申込みをまとめ、神職を介して交付を受ける。大麻頒布数は二二〇体内外でここ数年来頭うちの状態にあ

る。駒井でも氏子総代を通じて神職から交付を受けるのだが、従来配付を受けている世帯は自動的に頒布され、新たに配付を希望する者だけが申し出ることになっている。

(7)

駒井では、地付きの者が家を新築して一戸を構える場合でも、神棚は家屋の不可欠の一部とはみなされなくなってきた。家を新築する場合、地鎮祭を行うものは一割前後にすぎず、地付きの者で地鎮祭を行わない例も珍しくないという。神道の慣行からの離脱がここにもみられる。

(8)

現状維持的衰退は野崎の神宮大麻頒布数に集約的に示されているが、なお八幡社で執行される元旦祝賀式、祈年祭、風祭、例祭、薬師如来縁日、勤労感謝祭が年々くり返されているけれども、出席人数は町会役員と少数の組長に限定される傾向があること、例祭の余興が廃止されたこと、薬師縁日の余興が防犯の映画でいどのものに縮小したこと、などにも窺われる。地区内の世帯数が激増しているのに神社活動がせいぜい現状維持的であることは、相対的に衰退に向かっていることになる。

(9)

来住者でも七五三には子どもをつれて宮参りをする。ところが、野崎の八幡社には神職がおらず神社の扉も閉めたままなので、踵を返して下連雀の八幡大神社へ行ってしまう。そこで町会役員会では、七五三にも神職に勤務してもらおう件が議されている。さらに、訳の分からない祝詞を読み上げるよりは、神職が精神訓話の一つもしてくるよう望む声もある。これらの問題は駒井ではまだ深刻ではないが、早晚野崎と同様の課題が顕在化するこ

とであらう。

(一九六八・四・二九脱稿、二〇〇六・八・一五改稿)

(東京教育大学名誉教授)